知識獲得型講義における「当日レポート方式」の導入

山　田　悟　史

1．はじめに
2．予習の促進
3．結果と考察（教員の立場から）
4．結果と考察（FDから）
5．まとめ
参考文献

1．はじめに

近年、従来の講義方式では学生の実態に合わなくなってきており、講義改善がFD改善のポイントの一つになっている。この講義改善の方法の１つに、当日レポート（Brief Report of the Day）方式（宇田、2000）[1]がある。当日レポート方式の最大の特徴は、講義内予習とも言うべき「構想段階」という時間が設けられている事である（宇田、2003）[2]。構想段階とは、講義の始めに与えられたテーマに対し、教科書や資料を読んだり、講義後半で書くレポートの一部を書き始めたりするものである。構想段階は通常講義の始めに15分程度が与えられるものである。宇田（2003）は、この構想段階の存在が、学生の講義への興味度を高める事を明らかにしている。当日レポート方式ではこの構想段階の後、情報収集段階、執筆段階という２つの段階に進む。情報収集段階では、他の学生との意見交換を行ったり、いわゆる通常講義のように教師からの説明を受けたりする。これを45分程度想定している。その情報収集が終わると、執筆段階となり、講義のテーマに関してレポートを書くことになる。このレポート執筆は、講義内あるいは当日中に書き上げ、提出するのが原則である。当日レポート方式では、書き上げたレポートを次回の講義までに教師がチェックし、次回の講義で学生にフィードバックすることも重要な特徴としているためである。それは、このフィードバックが、講義を受けてどれくらい自分の理解度が変化したかを明確にし、自己効力感の獲得をもたらすからである。宇田（2002）[3]はそれに加え、テーマ理解度に対するスケーリング・クエスチョンを導入することで自己効力感をさらに充実させる可能性があるとしている。構想段階前に事前スケーリングとして自己評定し、執筆後に事後スケーリングとしてもう一度自己評定するというもので、その場で講義での努力、進歩が確認できるため自己効力感の増進につながるというものである。

この当日レポート方式は提案以来、文科系科目の講義では成功的な報告が多く成されている。特に学生が自ら考えたり、意見を述べたりする科目においては大きな成果を上げているようであるが、一方で理系科目では成功的事例も少なく、適用が難しいようである。鷲野（2006）[4]は、当日レポート方式の理系講義への応用結果について、おおむね良好ではあったが、「数学」のような純粋理系科目では、当日レポート方式では重要な要素となる「適切な質問」の設定がむずかしく、満足

1）　宇田光「当日ブリーフレポート方式による講義－受講生が集中できるBRD－」『学校カウンセリング研究』⑶、2000年、pp37-44

2）　宇田光「当日ブリーフレポート方式による講義の効果⑵ ――受講生の興味度についての実験的検討――」『日本教育心理学会総会発表論文集』⑸、2003年、p74

3）　宇田光「当日ブリーフレポート方式による講義に関する研究⑷――スケーリング・クエスチョンの導入――」『日本教育心理学会総会発表論文集』⑷、2002年、p339

4）　鷲野翔一「当日レポート方式の理系講義への応用結果について」『工学・工業教育研究講演会講演論文集』、2006年、pp170-171

のいく結果とはならなかったとしている。このことは適切な質問が可能であれば、当日レポート方式は理系科目でも適用にたる方式であるということであると理解できる。

このように理系科目でも文科系科目ほど容易ではないにしろ適用の可能性を持つ当日レポート方式ではあるが、理系、文科系に関わらず知識獲得型の講義への当日レポート方式導入は難しいという意見が筆者の周りには少なくない。知識獲得型の講義においては、知識の獲得量が重要であり、講義の終わりのレポートだけでなく、講義の始めにも構想段階の時間を設ける当日レポート方式の導入は、提供できる知識量を明らかに減らすことになるからである。あるいは自分で考えることよりも、知識の獲得・定着とその理解が重要な講義では「構想段階」を設けても、大事な知識量を減らしても良いほどの効果が得られるとは思えないからである。つまり、知識導入型の講義においては、当日レポート方式最大の特徴である「構想段階」が最大のネックとなっているのである。

しかしながら、当日レポート方式は、講義改善の方法として高い効果を持つのは確かである。そこで、知識獲得型の講義においても、少しでも当日レポート方式の効果を得られる工夫ができないかと思い、同じ科目において３年間（半期科目計６回)、独自の工夫を加えて当日レポート方式での講義を行った。

２．予習の促進

当日レポート方式の最大の特徴は「構想段階」であることはすでに述べた。通常の当日レポート方式では講義の冒頭でその日のテーマを確認し「構想段階」へと入る。これは「講義内予習」と言えるものである。理想を言えば予備知識に乏しい学生は主体的に予習をすべきであろうが、それが見込めない近年、従来の講義形式ではギャップが生じるため、講義内予習が効果的になるのだと思われる。つまり予習が大事なのである。そこで、今回は当日レポート方式の仕組みを活かし、通常の予習の促進を加えることにした。その工夫として、以下の５項目を行った。

①講義の最後に来週の講義のテーマ、テキスト範囲を伝える
②「構想段階」でレポートを一度完結させる
③「構想段階」のレポートタイトルは当日伝える
④「構想段階」のレポートに少なくない点数を配する
⑤事前に調べたものは全て持ち込みを許可する

「構想段階」でのレポートタイトルは、事前に伝えた講義テーマを具体化し、内容を絞り込んだものにして当日伝える。その狙いは、事前に調べたものを丸写しするのを防ぐ事である。そして「構想段階」におけるレポートはその時間内に完結させ、単位認定に少なくない影響をもつだけの配点で採点する。学生は、調べてきた内容をタイトルに合わせて短時間で内容をまとめねばならないため、事前に与えられたテーマについて広く調べてくるだけでなく、ある程度目を通してくる必要が出てくる。その結果、ほとんどの学生がしっかりと下調べをして「構想段階」のレポートに臨んでいた。

３．結果と考察（教員の立場から）

当日レポート方式の「構想段階」を設けることで、教員が直接教える内容は確かに減少した。しかし、講義内予習の前に、通常の予習をしっかりさせることで、学生は２度予習することになり、予備知識がしっかりと身につくため、通常講義よりも同じ内容を短時間で説明が可能になり、その減少幅は予想以上に小さかった。

また、予習、「構想段階」、「情報収集」、「執筆」の４段階で同じ内容を学ぶため、通常の講義よりも知識の定着・理解が予想以上に高くなった。これは内容量の減少を補ってあまりある結果であり、当日レポート方式の導入は大変満足のいくものであった。

以上のことから、知識獲得型講義においても予習を導入することにより当日レポート方式を上手く活用できる可能性が示された。た

だ、知識獲得型の講義と言っても、様々なタイプの講義があり、この結果をそのまま当てはめる事はできない。しかし、予習を工夫する事で応用は可能であると考える。今回は「構想段階」でレポートを書かせたが、事前に与える課題を工夫し、例えばレポートではなくミニテストなどにしても良いと思われる。また「構想段階」を通常の予習に全て置き換えて、事前レポートなどを課しても良いと思われるが、予習が講義直前では無くなるため、その影響があるかもしれない。これは今後の課題の一つとしたい。

一方で問題もあった。それは他の講義と比較して脱落者が多いと言うことである。その理由は、多くの勉強量をシステム的に強いるためであろう。そうであれば、その多くは「楽に単位を取得したい」という学生であり、そうでなければ家庭学習のクセが全く身についていない学生であると思われる。これは講義方法そのものとは別の問題と考えられ、高校までの教育のあり方や大学での教育のあり方、リメディアル教育などをどうするかなどの議論を要するものと考える。

また、レポートの採点等に大きな時間と労力がかかるのが教員としては問題となるかもしれない。

4．結果と考察（FDから）

当学では、前期か後期のいずれかでFDのための講義アンケートが行われる。その評価の一部を表１に示す。「総合して、この授業は自分にとって有意義である」という設問に対する評価で、４＝強くそう思う、３＝そう思う、２＝あまりそう思わない、１＝全くそう思わない、の４段階からの選択である。また、この講義に対するポジティブなコメント（良コメント）の数とネガティブなコメント（悪コメント）の数も示した。悪コメントのカッコ内の数は「内容量が多すぎるorレポートの時間が足りない」というコメントの数である。表１を見ると、2008年、2009年は評価の平均がそれぞれ、3.45、3.44であったが、2010年には3.61と少し高くなった。2088年、2009年ともにネガティブな評価のほとんどが「内容量が多い」というものであり、毎年少しずつ内容量を減らした結果、2010年には内容量のに関するネガティブコメントはゼロとなり、それが2009年までより高い評価につながったと考えられる。ただ、筆者の印象としては少し「内容量が多い」というコメントが出るくらいが学生にとってちょうど良いトレーニングになっていると感じた。ちなみに2010年の４つのネガティブコメントは全て「評価が厳しい」というものであった。

次に「当日レポート方式ついてどう思うか」という設問に対する自由記述回答を図１に示す。これを見ると、多くの学生が当日レポート方式に対し「大変だが良い」とコメントしている。また、図１の「10」のコメント「事前に自分で調べておくことで授業の内容がとても頭に入りやすかった」に見られるように、予習が効果的であった事が示唆されている。ネガティブなコメントは「定期試験の方が良い」と回答が１つだけであった。

以上の事から、知識獲得型講義における当日レポート方式の導入は、学生の評価も良く、学生にとっても良い方式であるといえる。つまり、講義内予習である「構想段階」に通常の予習を加えることにより、当日レポート方式導入の障壁となっていた講義内容の低下をある程度免れることができ、当日レポート方式の効果を十分に得ることができるということである。内容の低下を免れる理由として、「読めばわかる程度のものは予習のみでも十

表１　FD評価の点とコメント数（カッコ内は「内容が多い」とのコメント数）

年度	人数	平均	4	3	2	1	良コメント	悪コメント
2008	31	3.45	18	9	4	0	23	9（7）
2009	16	3.44	7	9	0	0	14	3（2）
2010	31	3.61	20	10	1	0	20	4（0）

1．レポートをやることがあまりないから、やりがいがあると思った
2．最初はめんどくさいと思っていたけど、回をおうごとにレポートの書き方を工夫したり、見やすくするようになって楽しくなった。大変だけど聞くだけの授業より楽しい
3．短い時間でレポートを書くことは大変だが力がつくと思う
4．難しいが、自分のためになって良いと思います
5．現時点の自分の考えをoutputした後に、間違いや、新たにわかったことをinputでき、更に最後に再認識のためにoutputできるので効率よく効果が期待できると思う
6．ちゃんと自分自身でまとめられるからよいと思う。(身につく、知識になる)
7．BRD方式は、難しいけれども、生徒のためになる方式だと思います。
8．学生に意欲的に取り組ませられるのでいいと思う
9．授業の内容が頭に入りやすいと思います。
10．事前に自分で調べておくことで授業の内容がとても頭に入りやすかった。
11．調べてきても当日にテーマが変わることがあって、意味ないなと感じることがあったが、授業中は自分の考えや理解したことを 早くまとめるという練習ができたので良かったと思う。
12．ちょっと難しいけれども、自分の力になっているし、がんばれる。
13．自分的には定期試験の方が良い。

図１　設問「当日レポート方式について」に対する自由記述の評価

分で、講義であえて扱わなくても良い」、「少し難解な内容も予習により、講義内の説明は短時間で可能である」ということが上げられる。

５．まとめ

講義改善の方法として高い成果を上げている当日レポート方式に、更に予習をせざるを得ない仕組みを加えて導入することで、知識獲得型講義においても良い効果を得た。ポイントとしては以下に予習をさせるかということと、予習と「構想段階」のやり方の工夫にある。

予習が授業改善につながるのはなぜだろうか。考えられるのは予備知識のギャップである。講義で求められる予備知識と実際の学生の予備知識に大きなギャップがあり、それが講義の展開に影響し、講義内容を少なくさせていると感じることも少なくない。その障害となっているギャップを予習がある程度埋めてくれるということが考えられる。「最近の学生は予習をしてこない」と言われたりもするが、受験戦争を勝ち抜いてきた学生と大学全入時代の学生では、一部の偏差値の高い大学を除いてはもともと予備知識の高さが異なるのではないだろうか。もう一つ考えられるのが、授業前の状態である。梶田（2003）[5]は学習前の状態である「覚醒段階」では、「既有知識の活性化、問題意識、緊張状態、知的好奇心」が重要であるとしている。予習がその「覚醒段階」の状態を高める働きをするかもしれない。言い換えれば、最近の学生は授業に臨むにあたって「覚醒段階」の状態が低いのかもしれないということである。筆者としてはこの「覚醒段階」での状態の低さが一番影響しているのではないかと感じている。これは宇田（2004）[6]もその重要性を示唆する研究を行っており、いかに講義のはじめに、学習に対する状態を作れるかが、当日レポート方式に限らず重要であると考える。

5）　梶田正巳「勉強力をみがく」筑摩書房、2003年

6）　宇田光「当日ブリーフレポート方式による講義の効果(3)――授業前の「覚醒状態」が授業成果の認知に及ぼす影響――」『日本教育心理学会総会発表論文集』(46)、2004年、p61

参考文献

1．宇田光「当日ブリーフレポート方式による講義－受講生が集中できるBRD－」『学校カウンセリング研究』⑶、2000年、pp 37-44
2．宇田光「当日ブリーフレポート方式による講義の効果⑵――受講生の興味度についての実験的検討――」『日本教育心理学会総会発表論文集』⑷⑸、2003年、p74
3．宇田光「当日ブリーフレポート方式による講義に関する研究⑷――スケーリング・クエスチョンの導入――」『日本教育心理学会総会発表論文集』⑷⑷、2002年、p339
4．鷲野翔一「当日レポート方式の理系講義への応用結果について」『工学・工業教育研究講演会講演論文集』、2006年、pp170-171
5．梶田正巳「勉強力をみがく」筑摩書房、2003年
6．宇田光「当日ブリーフレポート方式による講義の効果⑶ ――授業前の「覚醒状態」が授業成果の認知に及ぼす影響――」『日本教育心理学会総会発表論文集』⑷⑹、2004年、p61
7．宇田光「大学講義の改革（BRDの提案）」北大路書房、2005年